

# 中古語の動詞「換ふ」の格表示について

小田 勝

## 1. 本稿の目的

中古語の助詞の「を」と「に」による格表示については、

(1) 我レ大王ノ勅ヲ背<sup>そむき</sup>て(今昔<sup>1)</sup>・3-25・

①264): 現代語「勅に背く」

(2) 馬ヲ乗<sup>う</sup>ル事久クシテ(今昔・7-31・

②147): 現代語「馬に乗る」

(3) 此ノ大臣、医道ニ極<sup>きほめ</sup>タルニ依<sup>より</sup>テ(今昔・4-32・①365): 現代語「医道を極める」

のように、現代語と異なる例が相当数存在することも含め<sup>2)</sup>、なおその原理には不明な点が多い。

ところで、『今昔物語集』の、

(4) 獨師「善哉<sup>いひ</sup>」ト云テ太子ノ衣ニ「自分」袈裟ヲ換ツ。太子ハ獨師ノ袈裟ヲ取テ着給<sup>と</sup>ツ。(今昔・1-4・①21)

は、交換前の「自分の袈裟」が「を」格で、交換後の「太子の衣」が「に」格で表示されている(すなわち「交換前の物を、交換後の物に換える」)一方、

(5) [源大夫は]持タル弓・胡録ナドニ金鼓ヲ換<sup>かへ</sup>ヘ、衣・袈裟直<sup>やなぐひ</sup>ク着テ、金鼓ヲ懸<sup>く</sup>ニ懸<sup>かけ</sup>テ云ク…(今昔・19-14・④156)

では、交換前の「持タル弓・胡録」が「に」格で、交換後の「金鼓」が「を」格で表示されている(すなわち「交換前の物に、交換後の物を換える」)。どうしてこのよう

なことが起きるのだろうか。

本稿は、中古語の動詞「換ふ」に、

(6) [古い物]を[新しい物]に換ふ⇔[古い物]に[新しい物]を換ふ

という格の代換が存在することを指摘し、「に」・「を」という格表示(および格の非表示)は何なのか、という問いへの1つの事例研究とするものである。

## 2. 「かふ」の格表示

古代語に、前節(6)のような格の代換が存在することを実証するため、中古27作品<sup>3)</sup>で、動詞「かふ」の格表示を調査した。下二段動詞「かふ」を、その意義と格表示とから、次のように分類する。

「かふ」が「交換(replacement)」を表すもの(「換ふ」)を「R」とし、「今までの委員長・古田氏から、新委員長・新田氏に変わる」という事態を、

①「古田氏を 新田氏に 換ふ」(旧ヲ新ニ)と表現するものを「R1」

②「古田氏に 新田氏を 換ふ」(旧ニ新ヲ)と表現するものを「R2」

③「委員長を 換ふ」のように、新旧を表さない表現を「R3」

とする。

「かふ」が「変化(transformation)」を表すもの(「変ふ」)を「T」とし、「古木を燃やして炭にする」という事態を、

①「古木を 炭に 変ふ」(旧ヲ新ニ)と

表現するものを「T1」

②「古木に 炭を 変ふ」(旧ニ新ヲ)と表現するものを「T2」

③「かたち(さま)を 変ふ」のように、新旧を表さない表現を「T3」とする。

## 2.1 「換ふ」(交換)の格表示

「換ふ」(交換)の格表示の調査結果は、次の通りである<sup>4)</sup>。

| R1型    |   | R2型  |   |
|--------|---|------|---|
| 旧を新に   | 1 | 旧に新を | 2 |
| 旧φ新に   | 1 | 旧に新φ | 2 |
| 旧を以て新に | 1 | 旧に   | 5 |
| 旧して新に  | 2 | 新を   | 0 |
| 旧を     | 1 |      |   |
| 新に     | 9 |      |   |

「R3」型は「～を」表示18例、格助詞の非表示19例。「R1」か「R2」か不明14例<sup>5)</sup>。

以下に、各例をあげる。

### 【R1の句型】

#### 【旧を新に】

(7) 獨師「善哉」ト云テ太子ノ衣ニ「自分の」袈裟ヲ換ツ。太子ハ獨師ノ袈裟ヲ取テ着給ツ。(= (4))

#### 【旧φ新に】

(8) 魚ヲ買テ持来ルφ、稻・粳等ニ換テ、今年一二段ノ田ヲ作テ(今昔・17-26・④47)

#### 【旧を以て新に】

(9) 布一段ヲ以テ賤ノ鞍ニ換ヘテ、此ニ乗テ京ノ方ニ上ルニ(今昔・16-28・③546)

#### 【旧して新に】

(10) いまひとむらの布して、馬の草や我が食ひ物などに換へて(古本説話集・195)

### 【旧を】

(11) この修理の大夫は、[姓ノ]橘を[藤原ニ]換へられにしかば、なほ関白の御子なるべし。(今鏡・98)

### 【新に】

(12) 休み所取りつつ、日の御装ひに換へ給ふ人々も多かり。(源氏・胡蝶・③171)

(13) 此ノ餅ノ片破ヲ破リツ、要ノ物ニ換ヘケレバ、貧キ事無シ。(今昔・16-15・③508)

### 【R2の句型】

#### 【旧に新を】

(14) [源大夫は]持タル弓・胡録ナドニ金鼓ヲ換ヘテ、衣・袈裟直ク着テ、金鼓ヲ頸ニ懸テ云ク…(= (5))

(15) 見レバ、年二十余許ナル女人ノ形チ美麗ナルヲ縛テ、二人ノ鬼前後ニ有テ、打チ追テ来ル。…男、此ヲ聞テ哀ミ悲テ、此ノ小僧ニ申シテ云ク、「我ハ年既ニ半ニ過ギテ、殘ノ命幾ニ非ズ。此女は年末ダ幼クシテ、行末ヘ遙也。然レバ、我レハ此ノ女ニ換テ、女ヲ免シ遣」ト。小僧此ヲ聞テ宣ハク、「汝ガ心極メテ慈悲有リ。我ガ身ニ換ヘテ人ヲ助クル事、此難有キ事也。此ニ依テ、共ニ請免サム」ト宣テ、鬼ニ訴テ、共ニ被免ヌ。(今昔・17-26・④48)

#### 【旧に新φ】

(16) 青色の衣(=六位ノ衣)に、緋衣(=五位ノ衣)φ換ふとて思ふ、[歌](うつほ・菊の宴・②43)

(17) [源大夫は]着タリケル水干袴ニ、布衣・袈裟ナドφ換ツ。持タル弓・胡録ナドニ金鼓ヲ換ヘテ、衣・袈裟直ク着テ、金鼓ヲ頸ニ懸テ云ク<sup>6)</sup>…

(今昔・19-14・④156)

【旧に】

(18) [コノ姫君ノ形見ノ数珠ヲ] 別れに  
し人(=亡キ姫君)に換へても見てし  
がなほど経てかへる玉もありけり(栄  
花・もとのしづく・②259)

(19) [中納言邸ノ] おもの(=御食膳)い  
できにければ、[あこぎハ] 御厨子所に  
来て、[台所働キノ女ニ]「あが君、あが  
君」と言ひて、かの(=アノ叔母ノクレ  
タ) 白き米多くに換へて(=多量ノ白  
米ヲ台所ノ食物ト交換シテ)、御台ま  
ゐりに来ぬ(=少将ト姫君ニ御食膳ヲ  
差シ上ゲニ来タ) <sup>7)</sup>。(落窪・78)

(20) 「これ(=コノ子ヲ) 人にはなたと  
なん思ふ。…」と言ひ侍りければ、[子  
ヲ] この持ちたる錢に換へて来にしな  
り。(大鏡・37)

【R3の句型】

【～を】

(21) 試みに所を換へ給はむとて、二条の  
院に渡し奉り給ひつ。(源氏・若菜下・  
④214)

【～φ】

(22) 乳母(=犬ノ守役) φ換へてむ。いと  
うしろめたし。(枕草子・39)

以上から、中古語の動詞「換ふ」の格表  
示は、以下のようにまとめられる。

I A 2項表示の場合、「旧を新に換ふ」  
(用例7)と「旧に新を換ふ」(用例  
14・15)という2種の格表示が存す  
る。

B 2項表示のとき「を」助詞は非表示  
が可能で、Aの変形として「旧φ新  
に換ふ」(用例8)、「旧に新φ換ふ」  
(用例16・17)の両形がある。

C 1項表示の場合、「Aを換ふ」とあ  
れば、Aは「交換前(旧)のもの」で  
ある(用例11)。「Aに換ふ」の場合、  
「R1」の句型でAが「交換後(新)の  
もの」である場合(用例12・13)と、  
「R2」の句型でAが「交換前(旧)の  
もの」である場合(用例18～20)と  
がある。

D 「R1」「R2」の句型における1項表  
示で補語<sup>8)</sup>が無助詞<sup>9)</sup>で現れること  
はない。

上記のI Cを裏付ける用例に、次のよ  
うなものがある。

(23) 古水干一つに換へたるものを、そこ  
ばくの物に換へてやみにけん、げにあ  
きれぬべきことぞかし。(宇治拾遺・  
442)

(23)では、最初の「に」格「古水干一つに」  
が「交換前(旧)のもの」、2番目の「に」格  
「そこばくの物に」が「交換後(新)のもの」  
で、両者がともに「に」格で表示されてい  
る。なお、「R1」と「R2」の句型は、ともに  
和文体資料にも漢文訓読体資料にも存  
し、文体による違いは認められないよう  
である。

## 2.2 「変ふ(変化)」の格表示

「変ふ(変化)」の格表示の調査結果は、  
次の通りである。

| T1型  |   | T2型  |   |
|------|---|------|---|
| 旧を新に | 1 | 旧に新を | 0 |
| 旧を   | 2 | 旧に   | 0 |
| 旧φ   | 2 | 新を   | 0 |
| 新に   | 0 | 新φ   | 0 |

「T3」型は「～を」表示73例、格助詞の非  
表示31例。

以下に、各例をあげる。

#### 【T1の句型】

##### 【旧を新に】

- (24) 我が身をあらぬ(＝本性トハ違ウ男姿)に変へて過ぐし給へること、あるべきことならず。(とりかへばや・300)

##### 【旧を】

- (25) …といふ古歌「ノ字句」を変へさせ給へるなるべし。(栄花・浦々の別・①255)
- (26) 親王たち、上達部などの御設けも、めづらしきさまに、常のことどもを変へて仕うまつらせ給へり。<sup>10)</sup>(源氏・藤裏葉・③460)

##### 【旧φ】

- (27) この君の御童姿φ、いと変へまうく思せど(源氏・桐壺・①44)
- (28) 角髪結ひ給へるつらつき、顔のにはほひ、[少年ノ] さまφ変へ給はむこと惜しげなり。(源氏・桐壺・①45)

#### 【T3の句型】

##### 【～を】

- (29) 前さきの尚侍の君、かたちを変へてんと思し立つを(源氏・竹河・⑤103)

##### 【～φ】

- (30) さまφ変へたる春の夕暮れなり。(源氏・玉鬘・③96)

以上から、「変ふ」の格表示は次のようにまとめられる。

Ⅱ A 「変ふ」は「旧を新に変ふ」という格表示のみをもつ(「旧に新を変ふ」という格表示はない)。

B 1項表示で、補語の「を」助詞は非

表示が可能である。

Ⅱ A の点で、変化を表す「変ふ」は、交換を表す「換ふ」とは異なっているといえることができる。

### 3. 「換ふ」の格代換現象

以上、中古語の動詞「換ふ」は、

- (31) a 旧を新に換ふ

b 新を旧に換ふ

という2つの格表示パターンをもつことを確認した。

従来、格の代換現象は、

- (32) a 壁にペンキを塗った。

b ペンキで壁を塗った。

- (33) a 花瓶に水を満たした。

b 花瓶を水で満たした。

- (34) a 部屋に人があふれていた。

b 部屋が人であふれていた。

のような句型が目立ってきた。しかし、この、「旧を新に換ふ⇔新を旧に換ふ」という格の代換は、両者で全く同じ格助詞が転換している点((32)～(34)は異なる助詞の組み合わせである)、「を」と「に」という、日本語で最も基本的な格表示<sup>11)</sup>相互で転換を見せる、という点で、極めて注目すべき文法現象であると思われる。また、現代語の

- (35) 米と交換する。

も、「何かを米に交換する」意と、「米を何かに交換する」意との両義があり、交換動詞の格形式は、古代語・現代語ともに注目すべき文法現象であるといえることができる。

この「旧を新に換ふ⇔新を旧に換ふ」が同値であるという格の代換が、

- (36) 中古語で「米に換ふ」といった場合、

「何かを米に換える」意も、「米を何かに換える」意も表す。(= I C)

という奇妙な現象を起こしているのである。

#### 4. 「着換ふ」の格表示との対照

筆者は以前に、複合動詞「着換ふ」の格表示について調査した(小田(2012))。「着換ふ」の格表示は、「換ふ」の格表示と若干の齟齬をみせるので、ここで、「着換ふ」の格表示についても概観したいと思う<sup>12)</sup>。

中古語の動詞「着換ふ」(以下、敬語形「奉り換ふ」を含む)は、格表示の点で、たいへん面白い性質がある。現代語の「着換える」は、

(37) 洋服を和服に着換えた上、楽々と長火鉢の前に坐り(芥川龍之介「玄鶴山房」)

のように、

(38) 旧服を 新服に 着換える

という格配置をとる(以下、「着換える前の服」を「旧服」、「着換えた後の服」を「新服」という)。しかし中古語では、補語が「旧服」の場合も、「新服」の場合も、無助詞であることが常態なのである<sup>13)</sup>。

補語が「旧服」の例。

(39) [落葉宮ハ母ノ許ニ] 渡り給はむとて、御額髪の濡れまろがれたるひきつくろひ、単衣の御衣ほころびたる 着換へなどしたまでも(=「給ひても」)、とみにもえ動い給はず。(源氏・夕霧・④421)

(40) きたなきもの 着換へ侍りつる程なり。(落窪・78)

(41) 本着タリツル表ノ衣・指貫ニハ血ノ付タルヲ、…表ノ衣・指貫ナド 着

換テ、然気色無クテ宿所ニ入り臥ニケリ。(今昔・23-15・④352)

補語が「新服」の例。

(42) 少納言、「源氏ガ紫君ト出テ行クノヲ」とどめ聞こえむ方なければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて、みづからもよろしき衣 着換へて[車ニ]乗りぬ。(源氏・若紫・①255)

(43) [女房ガ末摘花ニ] よろしき御衣 奉り換へ、つくろひ聞こゆれば、正身は、何の心げさうもなくしておはす。(源氏・末摘花・①282)

(44) 「はや[夕顔ノ遺骸ノアル東山ニ]おはしまして、夜更けぬさきに帰らせおはしませ」と[惟光ガ源氏ニ]申せば、このごろの御やつれにまうけ給へる狩の御装束 着換へなどして出で給ふ。(源氏・夕顔・①177)

以上にみるように、中古語の「直衣 着換ふ」は、「直衣を別の服に着換える」意(用例39～41)も、「着ていた服を直衣に着換える」意(用例42～44)も表す。すなわち、

(45) 旧服ヲ 新服ニ 着換ふ

の意味で、

(46) a 旧服 着換ふ

b 新服 着換ふ

の両方が言えるのである。

「着換ふ」の補語が格助詞を表示させている例は、調査資料(中古の56作品)中、補語が旧服の例1例、

(47) 縹の帯の所々かへりたる 着換へて、男のおこせたれば<sup>14)</sup>(和泉式部続集・1251 詞書)

補語が新服の例2例だけである。

(48) 舍人男、着タリケル水干ヲ脱テ、「[その玉を]此ニハ換テンヤ」ト。玉ノ

主、所得シツト思ヒケルニヤ、水干ヲ  
とり取、手迷てまどひヲシテ、船ヲ指さし放はなテ去ニケレ  
さしはなちバ、舍人男、[玉を]さ高ク買ツルニコソ  
とト思ヒケレドモ、異水干きヲ着換かへテ、悔  
おもひシト思つテ、玉ヲつバ袴ノ腰ニ裏つテ返ル  
程ニ(今昔・26-16・⑤67)

- (49) [薰ハ] 濡れたる御衣どもは、みなこの人(=宿直人)に脱ぎかけ給ひて、取りに遣はしつる御直衣に奉り換へつ。

(源氏・橋姫・⑤150)

用例(48)(49)から、新服は「を」格(用例48)でも「に」格(用例49)でも現れ得るということがわかる。また、用例(49)は、『源氏物語大成校異篇』によれば、

- (49) a 御直衣に奉り換へつ。

b 御直衣ひとくだりを奉り換へつ  
(別本の横山本)

c 御直衣ひとくだりに奉り換へつ  
(別本の高松宮本・麥生本・阿里莫本)

のような異文をもっていて、これは新服の格が「に」でも「を」でも無助詞でも相通じること示している。

以上から、「着換ふ」の格表示について、次のようにまとめられる。

Ⅲ A 中古語の動詞「着換ふ」は補語が無助詞であることが常態であり、「着換え前の服」も「着換え後の服」も無助詞で表される。

B したがって、古典文の「直衣を着換ふ」は、「直衣を別の服に着換える」意も、「着ていた服を直衣に着換える」意も表す。

C 「着換ふ」の格助詞表示例は、僅少だが、「旧服を着換ふ」、「新服{を／に}着換ふ」という格表示をもつ。

このⅢ B・Ⅲ Cの現象が存在する背景には、前節にみた「旧を新に換ふ⇔新を旧に換ふ」という格の代換が存するはずである(用例(48)はR2「新を」型、用例(49)はR1「新に」型といえる)。ただし、「着換ふ」と「換ふ」の間には齟齬もある。すなわち、「着換ふ」は補語が無助詞であることを常態とする(=Ⅲ A)のに対し、「換ふ」(交換の意で、補語の新旧を問題にする場合、すなわち「R1」「R2」の句型の場合)は1項の補語が無助詞であることはない(=Ⅰ D)。Ⅲ A・Ⅲ CとⅠ D・Ⅰ Cとの間にみられる齟齬は、「着る」が要求する格(「を／ $\phi$ 」)と、「換ふ」が要求する格(「を／ $\phi$ 」および「に」)との合成の問題と考えられる<sup>15)</sup>。

## 5. 結論

本稿の結論は次の通りである。

①動詞「換ふ」は「旧を新に換ふ」と「旧に新を換ふ」という2種類の格の表示法があり、「旧を新に換ふ⇔新を旧に換ふ」が同値となる。この格の代換は注目されるべき文法現象である。

②この結果、中古語では次のような(現代語からみると)奇妙な現象が存する。

(a) 中古語で「米に換ふ」といった場合、「何かを米に換える」意も、「米を何かに換える」意も表す。

(b) 中古語で「太刀を弓に換ふ。」<sup>16)</sup>といった場合、「太刀から弓への交換」の意も、「弓から太刀への交換」の意も表す。

(c) 中古語で「直衣を着換ふ」といった場合、「直衣を別の服に着換える」意も、「着ていた服を直衣に着換える」意も表す。

## 注

### 1) 依拠テキストは次の通りである。

和泉式部集(岩波文庫)、今鏡(『今鏡本文及び総索引』)、栄花物語・大鏡・落窪物語・祝詞・夜の寝覚(日本古典文学大系)、古本説話集(『古本説話集総索引』)、今昔物語集・万葉集(新日本古典文学大系)、とりかへばや物語(『新釈とりかへばや』)、その他は全て新編日本古典文学全集による。

「かふ」の漢字表記は「換ふ」「変ふ」に統一したほか、表記は私意によって改めたところがある。用例中の「…」は中略したことを示す。出典名で、物語は、『源氏物語』を「源氏」とするように、「物語」部分を省いて示す。出典末尾の数字は依拠テキストの頁数(丸数字は巻数、歌は歌番号)を示す。

### 2) 信太(1981)などの研究がある。

### 3) 次の27作品：竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語・落窪物語・宇津保物語・多武峯少将物語・源氏物語・夜の寝覚・浜松中納言物語・狭衣物語・栄花物語・大鏡・篁物語・堤中納言物語・源氏物語絵巻詞書・今鏡・とりかへばや物語／土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・枕草子・和泉式部日記・更級日記・讃岐典侍日記／今昔物語集・古本説話集。

### 4) 「φ」は格助詞の非表示を示す。「いな、換へじと思したるものを」(枕草子・176)のように補語の現れていない例、「換へつる袖に」(うつほ・吹上下・①543)のように補語が被修飾語の例は除外する。また、「命(身)に換へて」という慣用表現の例32例も除外した。「命(身)」を「旧」と考えれば、【R2旧に】

の句型26例、

- ・ 身に換へてこの御身一つを救ひ奉らむと(源氏・明石・②226)
- ・ 惜しからぬ命に換へて目の前の別れをしばしとどめてしかな(源氏・須磨・②186)

### 【R2旧に新を】の句型2例、

- ・ これ(＝中君)をなむ命にも換へむと思ひ侍る。(源氏・東屋・⑥28)

### 【R1新に】の句型4例、

- ・ それ(＝アナタノ気持チ)に換へつる命にて(夜の寝覚・223)

が表の数値に追加されることになる。

### 5) 次のような例である。

- ・ 若キ男ノ[蛇<sup>おの</sup>を持<sup>ゆる</sup>った男<sup>たまひ</sup>に]云ク、「其ノ蛇、己レニ免シ給テムヤ(＝私に免じて放してくれませんか)。…只ニテ可乞<sup>こふべ</sup>キニ非ズ(＝無料でくれと言っているではありません)。蛇を此ノ着タル衣<sup>きぬ</sup>ニ換へ給へ」ト。…蛇持、「其レニハ換ヘテム」と云へバ、男衣ヲ脱ギテ与フルニ、[蛇持<sup>おの</sup>は]衣ヲ取テ蛇ヲ男ニ与ヘテ去ルニ(今昔・16-15・③505)

この下線部は、話し手である「若キ男」を主体とすれば、「蛇」が新で「衣」が旧(R2「旧に新を」型)であるが、聞き手の「蛇持」を主体とすれば逆(R1「旧を新に」型)となる。次例も同様で、

- ・ 吉キ太刀ヲ弊<sup>つた</sup>キ弓<sup>かへ</sup>ニ換ツルガ嬉<sup>うれし</sup>サニ(今昔・29-23・⑤344)

「今ノ男」が持っていたのが「太刀」、「本ノ男」が持っていたのが「弓」であるから、「本ノ男」を主体とすればR2「旧に新を」型、「今ノ男」を主体とすればR1「旧を新に」型となる(「嬉しい」のはどちらでも「本ノ男」)。



- 6) 2文めは「旧に新を」の例として、用例(14)(= (5))にあげた。
- 7) 本誌査読者から「白き米(を)多く(の食べ物)に換へて」とは読めないか、との指摘をいただいた。そう読むなら、この例は「R1」の「旧 $\phi$ 新に」の句型ということになる。今、日本古典文学大系・新潮日本古典集成・新編日本古典文学全集・角川文庫(室城秀之訳注新版)等の解釈に従う。
- 8) 本稿では、主格以外の格成分を「補語」という。
- 9) 以下、「無助詞」とは格助詞の非表示をいう。
- 10) 「めづらしきさまに」は「珍しい仕方で」(新編日本古典文学全集)のように読まれているが、「めづらしきさまに、常のことどもを」と読むなら、「T1」の句型の「旧を新に」の例となる。
- 11) 連用格は「に」が唯一の本来的な辞であったらう(「が」「の」は連体格、「を」は間投助詞からのものであり、「より」「から」「へ」などは形式体言から転じた成立の新しいものである)。
- 12) 本節は小田(2012)に基づく。
- 13) 平安時代の文学作品56作品の調査で、補語が「旧服」の場合、「を」表示1例(用例(47))、「に」表示0例、助詞非表示13例。補語が「新服」の場合、「を」表示1例(用例(48))、「に」表示1例(用例(49))、助詞非表示10例(詳細は小田(2012)を参照)。
- 14) ただし、下線部は接続句である可能性もある。
- 15) 古代の複合動詞化で格がどのように引き継がれるかは未開拓の問題である。

- 16) 注5にあげた『今昔物語集』「吉キ太刀ヲ弊<sup>つたな</sup>キ弓ニ換<sup>かへ</sup>ツル」(今昔・29-23・⑤344)に基づく作例。

#### 参考文献

- 小田勝(2012)「動詞「着換ふ」の格支配について」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』31
- 工藤力男(1978)「格助詞と動詞との相関についての通時的考察」『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』26
- 信太知子(1981)「「～をそむく」から「～にそむく」へ—動作の対象を示す格表示の交替」『国語語彙史の研究』2
- 竹林一志(2007)『「を」「に」の謎を解く』笠間書院

#### 付記

本稿は、第63回中部日本・日本語学研究会(平成24年10月20日)で「中古語の格表示に関する事例研究—動詞「換ふ」を例に一」の題で発表したものを改題・改稿したものである。席上や発表後の懇親会、私信で、多くのご教示をいただいた。また、本誌査読者からのご教示により、用例の処理や論の構成を大幅に改めた。記して感謝申し上げる。

(岐阜聖徳学園大学)